

祈りは神との会話の一時であります。私達は祈りを通して初めて神と触れることが出来、神の前に正しく生きる第一歩を踏み出すことが出来ます。祈りは私達の信仰生活で大切な存在であり、神が建てられ、祈りの場、神の恵みが伝えられる場である教会もまた、この世に不可欠の存在であります。

さて本日の福音書は、目の見えないバルティマイという人の物語でありました。ここから今日は、心の目を開くということと、祈りとはどういうことが大切なのかを学んでみたいと思います。

ダビデの子というのは、救い主を現す言葉であります。旧約聖書の時代、人々は他国の圧政に苦しみ、救い主到来を待ち望んでおりました。ダビデはイスラエル統一王国最大の王と言われ、当時イスラエル王国は歴史の中で最大の面積を誇っておりました。救い主はダビデの子孫から誕生すると言われておりましたので、救い主のことをダビデの子と呼んでいたのです。

この目の見えないバルティマイが、ナザレのイエスだと聞いて、叫んで、「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください」と言い始めたのでした。多くの人々が叱りつけて黙らせようとしたが、彼はますます、「ダビデの子よ、わたしを憐れんでください」と叫び続けたということです。バルティマイは目は見えませんでしたが、心の目ははっきりと開いており、それが主イエスが救い主であることがわかっていたのでした。神の存在は私達の目には見えません。神は心の目を通して私達を感じることが出来るのです。私達の心の目は開いているのでしょうか。神を見つめてしっかり離れないようにしているのでしょうか。この物語は、心の目を開くことの大切さ、私達は何でも見えると思っていますが、心の目はどうなのか、神はむしろ私達の肉眼よりも、心の目を大切にされている、心の目を開くことを神は私達に望んでおられるのです。日々の忙しさに追われ、自分の心になかなか目をむける機会の少ない私達ですが、一日のたとえわずかでも、必ず心を落ち着けて自分が今何を考えているのか、今何を大切にしているのか、それに対して神は今何と語りかけておられるのか、振り返る時を持ちたいものです。

次に大切なことは、祈りとは心の叫びでなければならないということです。バルティマイは、誰が止めるのも聞こえないかのように、主イエス様に救いを

求めました。これは長年の苦しみが含まれた言葉であり、バルティマイの心の叫びであったのです。物乞いが何を言うか、全くうるさいとしか思わなかった人達、すなわち心の目の開いていなかった人達はただバルティマイをとめるだけでした。そんな人達にバルティマイの心の叫びを止めることは出来なかったのは当然です。

盲人は上着を脱ぎ捨て、躍り上がってイエスのところに来た。イエスは、「何をしてほしいのか」と言われた。盲人は、「先生、目が見えるようになりたいのです」。この姿を通して、心の叫びを神は必ず聞かれることを私達は学びます。私達はさまざまの機会に祈りをいたします。祈りは決して縁遠い存在ではありません。しかし私達の祈りを振り返ってみますと、祈祷書に書いてあるから、毎回同じことを唱えるから、そういうところはないでしょうか。祈りとは心の叫びなのです。それが自分よがりにならず、正しく祈るのを助けるために祈祷書があるのです。祈祷書は私達の祈りを助けるものであって、私達の祈りを制限し、ここに書いてあること以外で祈ってはならないというものではありません。

本日の福音書を通して、私達は自分の心の目を開くこと、そして自らがなしている祈りをもう一度振り返るべきことを学びます。自分自身の祈りを省み、自己中心を離れて正しく祈っているか、それは私達の信仰生活を通して取り組むべき大切なことがらです。私達が真に祈ることが出来たとき、神は多いに喜びになり、私達にこの世のものではない、神の国の平安が与えられることでしょう。